

【はじめに】

札幌青年会議所は、1951年の創立から70有余年に亘り、市民や地域の企業に支えられて存続してきました。日本における企業の平均寿命は30年程度と言われているなか、札幌青年会議所は何故70年を超えて存続することができるのでしょうか。それは、JCI Missionにも記されているように、「青年会議所は、青年が社会により良い変化をもたらすための発展と成長の機会を提供する」という使命の下、明るい豊かな社会の実現を目指し、地域課題と真摯に向き合い挑戦を続ける我々の姿が共感を生み続けてきたからではないでしょうか。

だからこそ我々は運動に関わる受け手に寄り添った事業を展開しなければなりません。決して事業そのものを目的とせず、課題解決に至らない自己満足な運動をしてはいけないのです。地域課題に挑戦することで未来に良い影響を及ぼし、市民から「ありがとう」と心から言ってもらえる運動を実践する必要があります。

そして、他者評価を基に自己評価をすることで揺るぎない誇りをメンバー全員に宿し、共感をより集める組織に進化を遂げ、青年らしく失敗を恐れず大胆に実践し、未来の明るい豊かなSAPPOROを創り上げましょう。

【組織の在り方を示し持続的な繁栄を目指す】

札幌青年会議所には長い歴史の中で脈々と承継されてきた様々な伝統や運動の理念があります。特に私たちは礼儀礼節を重んじ、伝統を大切にしてきたはずですが、いつの間にかしきたりの表面だけに囚われてはいないでしょうか。今日まで承継されてきた伝統は、青年会議所という組織の在り方を教えてくれています。承継されてきた意味を根底から考えていかなければなりません。その上で、本質を変えることなく時代に即したアップデートをしなければ、さらなる共感が生まれることはないのです。

また、伝統は口伝により、承継されることも多いものですが、2020年から始まったパンデミックの中で入会され、制限された環境下での活動を余儀なくされたメンバーが半数を超えてしまっている現在では伝達されていない情報も少なくありません。だからこそ我々は、長い歴史の中で脈々と承継されてきた伝統や運動の理念から在り方を学び、根幹を再認識するとともに多様な価値観を取り入れ、持続可能な組織に求められる姿を見出し、さらなる共感を得て次代につないでいく必要があります。変化を恐れることなく進化を遂げることができたのならば、札幌青年会議所の誇りは最大化し、共感者は増えるでしょう。共感を得ることで多くの仲間が集い、発信力は高まり、輝かしい未来への歩みは加速していきます。

【持続可能な支援を生み出す】

戦後の焼け野原から先人たちが不断の努力によって切り拓いてきたこの国は、多くの試練を乗り越え、先進国として成長を遂げてきました。多くの人々は、毎日当たり前のように食事をし、平等な教育を受け、快適な住居で安眠しています。しかし、日本国内において6人に1人が困窮している事実をご存知でしょうか。ひとり親家庭になると2人に1人と困窮している比率はさらに上がり、当たり前の生活が送れていない子どもたちが増えつつあります。それは、母子世帯数が多い札幌も例外ではありません。

責任世代の我々が、住み暮らすこのまちで涙を流し困っている人々がいる事実に向けないのであれば、思い描く理想の未来は決して訪れることはありません。

また、青年会議所で語り継がれる「少年と釣竿」の話にあるように、お腹を空かせている少年に釣竿で魚を釣って与えるのではなく、魚の釣り方と食べ方を教えなければ社会開発運動にはなりません。同様に、一時的な支援をするのではなく、持続的に困窮から脱却する方法を教えていかなければなりません。困窮という社会課題を持続的に解決できる仕組みを創り出す、つまり、困窮せず生きていく力を教え継続的に支援することで、住み暮らすこのまちの誰もが困窮しない世の中に寄与していきましょう。

【未来の担い手の育成】

昨今、デジタルツールをはじめとしたITの仕組みの導入によって新たな価値が創出されていくなかで、企業にとってもDX推進は避けて通ることのできない取り組みの一つとなっています。さらに、新型コロナウイルスの蔓延により、生活様式や企業活動が大きく変化し、テレワークの急増やリモート環境の整備が急速に進むなど、第3のニューノーマル時代を迎え、社会全体がデジタル技術を使いこなすのは当たり前になりつつあります。しかし、IT需要が高まる一方で、経済産業省の調べによると2030年時点でのIT人材の不足数は最大79万人と予想され、労働人口の減少が著しい現代においては、人材の創出や育成は必要不可欠であり、喫緊の課題であります。

発展と成長の機会を提供することが使命である我々が、対内外に向けた人材育成運動を通じてITリテラシーを高めると同時に、産学官民の連携の下、持続的に未来の担い手を育成し、未来のSAPPOROに貢献しなければなりません。

【地域経済の活性化を目指す】

市制101周年を迎えた札幌は、これまで先人たちのまちを想う主体的な行動によって様々な困難を乗り越えてきました。全国では、新型コロナウイルスの蔓延による経済活動の縮小やインバウンドの激減、戦争などの影響を受けた物価高騰、北海道では、少子化による生産年齢人口の減少や道外への若年層の流出、札幌では、北海道日本ハムフ

アイターズの本拠地移動後の札幌ドーム活用方法など、現代の課題に対して責任世代である私たちには何ができるでしょうか。

青年経済人として時代を築き上げる一翼を担う我々が、潜在する需要を捉え、中長期に渡る戦略的なアプローチを基に、英知と勇気と情熱を持って地域経済の発展に挑戦しなければなりません。市民一人ひとりが地域の一員であるという帰属意識を持ち、地域を愛し、活気を加速させることができれば、未来は良いかたちとなって地域に恩恵をもたらすことでしょう。

【未来の子どもたちのために】

日本の少子化が問題となっておよそ30年が過ぎ、いまだにその解決の糸口は見つかっておりません。そもそも、少子化の原因はどこにあるのでしょうか。晩婚化や価値観の多様化が主要因とされていますが、各種統計によると、子育て世代が産みたいと思う理想の子ども数は2～3人となっている一方で、実際に生まれる子どもの数（合計特殊出生率）は1.3人であるのが現状です。

また、内閣府の少子化に関する国際意識調査によれば、「あなたの国は、子どもを産み育てやすい国だと思いますか」という質問に対し、日本では61%が「そう思わない」と回答されており、国際的に見てその割合は非常に高くなっています。つまり、子どもの数はもっと欲しいが、子どもを産み育てづらい国であると考えているのです。我々は、このような現状を受け止め、未来の子どもたちのために行動しなければなりません。

地域課題を見つけ、より良い社会の実現に向けた運動を展開する我々だからこそ、未来の子どもたちのために、行政、企業、市民と協働し、子育て世代が理想の人数の子どもを産み育てやすい社会の実現に向けて歩みを進めていきましょう。

【つながりをより強固なものに】

歴史ある札幌青年会議所には、先輩諸氏が残していただいた様々なつながりがあります。各国の姉妹JC、各地青年会議所、行政、北海道コンサドーレ札幌をはじめとする企業や関係諸団体など、様々な協力体制を築き運動を展開してきました。近年では、第69回全国大会北海道札幌大会にて、新型コロナウイルスに屈することなく、史上初のWEB開催、史上初の全LOM登録の功績を遂げることができたのは、築き上げてきたつながりで成せたことに間違いありません。

人の流れが戻りつつある現状において、今一度絆を強めていきましょう。私たちの運動は、明るい豊かな社会の実現のためであることを忘れず、形は違えど同じ志を持つ団体と更なる強固な関係を構築できたのであれば、互いの強みを活かし、力強い運動を展開できることでしょう。

【共感が集まる組織に】

我々は、なぜ運動を発信し続けるのでしょうか。会員拡大のため、運動の理解者を集めるため、協力者を募るため、様々な理由はありますが、大切なのは無関心の人に関心を持っていただくことです。関心を持ってもらうためには、まず、共感していただくことが必要不可欠です。そして、共感を生み出すためには、誰にどのように発信するのかを見極める必要があります。単年度制の我々にとって、全市民に共感していただくのは難しいです。

まずはメンバーとその家族、そして敬愛してやまない先輩諸氏や自社の社員・同僚、さらには札幌青年会議所に関わる全ての人々へ適切なターゲットに絞り、必要とされる情報を必要な人に発信し、共感を高めていきましょう。身内にすら共感されない組織では、市民への共感を得ることはできません。しかし、共感を得ることができれば自ずと協力者は増え、運動の推進力となることは間違いありません。

【組織を繁栄させていくために】

新型コロナウイルスの蔓延により、対面型会議から非対面型会議への変更や、WEB例会の導入、対面での語り合いの減少など、様々な様式変更を余儀なくされました。我々が時代の変化に対応し、運動を展開できたのは、不変の理想を追求する熱い情熱を胸に、今できることを必死に考え実践してきたからであります。一方で、会員の半数以上がコロナ禍での運動しか知りません。徐々に人の流れは戻り、リアルとコンタクトレスの双方が取り入れられた時代が既に訪れています。

我々は、それぞれの良いところを兼ね備えた組織へと進化していかなければなりません。そのためには、今一度伝統と規律を重んじ、変化することを恐れず、双方の良さをしっかりと見極め、時代に即した組織へと歩みを進めていきましょう。

【結びに】

私たちは、家族、会社、友人、愛する人が住み暮らす札幌というまちを本当に愛しているのでしょうか。

札幌青年会議所に入る前から漠然と札幌というまちは好きだと感じていましたが、具体的には説明できませんでした。なぜなら、札幌についての知識や関心が薄かったからです。いえ、深く知ろうとしていなかったのかもしれませんが。しかし、JCライフを通じ、地域の課題に触れ、様々な人と語り地域愛を深めてきました。

愛の反対は憎しみではなく無関心である

マザー・テレサ

地域愛を持つということは、地域に関心を持つことから始まるのだと思う。世の中には様々な地域があるが、私たちはこのまちを選択し、生活をしている。

このまちを選択した誰もが、このまちを好きになり、このまちで暮らし続けてほしい。

いまこそ無関心に別れを告げ、関心が生み出す地域愛を胸に抱こう。
それは、私たちの青年らしい行動と自他ともに認める成長の原動力となるはずです。

その成長が、自分に関わる全ての人に恩恵をもたらすことは、先輩諸氏が証明している。

私たちも、続いていきましょう。

先輩諸氏が目指し、歩みを進めてくれた、私たちの愛してやまないまちSAPPORO
のために。